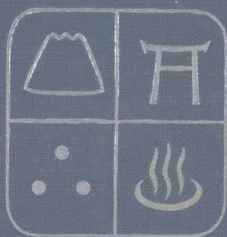


季節の旅

戸塚



季節の旅
戸塚文子

はるな
あふ

季節の旅

¥ 280.00

昭和 36 年 4 月 15 日 印刷

昭和 36 年 4 月 20 日 発行

著者 戸塚文子

發行者 佐藤道夫

東京都新宿区矢来町27

發行所 株式會社 大泉書店

TEL (341) 1006 • 2033

二光印刷株式会社 印刷

東京都文京区西江戸川町21

目次

“ 春 ”

残雪の加越温泉郷……………	11
橋がかかった城ヶ島……………	19
淡路―鞆の三角コース……………	26
オリーブ香る小豆島……………	32
山は霧島・岬は佐多へ……………	39

北 辺 の 海 へ	下 北 半 島 の 果 て 地	道 南 の 初 夏	原 始 の 花 園 ・ 神 秘 の 湖	“ 夏 ”	春 は 新 婚 旅 行	サ ク ラ と と も に	空 か ら 桜 島
104	96	88	81		73	66	58

秋ノ宮温泉郷……………	111
組立式インスタント温泉飯豊……………	118
裏磐梯キャンプ……………	125
シヤクナゲ咲く佐渡……………	133
初夏の奥日光……………	141
水戸から平へ……………	145
家族向き房州一周……………	152
海の公園北長門……………	159

初夏の島……………166

“ 秋 ”

紅葉の日塩道路……………173

熊ノ湯から草津へ……………181

木曾路を行く……………188

富山・宇奈月……………195

三次盆地を越えて……………200

山陰湯の旅……………206

南 国 土 佐 213

北九州横断新ルート 220

“ 冬 “

浦佐スキー場 239

飯山線のローカル・カラー 246

蒲郡周辺をさぐる 253

知られざる奥越高原 261

南紀は冬もあたたかい 268

山陽路食べあるき……………277

松山から宇和島へ……………284

完全暖房の温泉……………292

季
節
の
旅

春



残雪の加越温泉郷

北陸路の温泉には、一種独特のねっとりした情緒がある。他の土地には求められない地方色といつていい。それは裏日本の特異な風土が生んだものでもあり、長い伝統がたちかかってきた遺風でもある。太平洋岸の伊豆や箱根の温泉郷、或いは南紀州の温泉群には、見出されない何かが、風景にも生活にも漂っている。

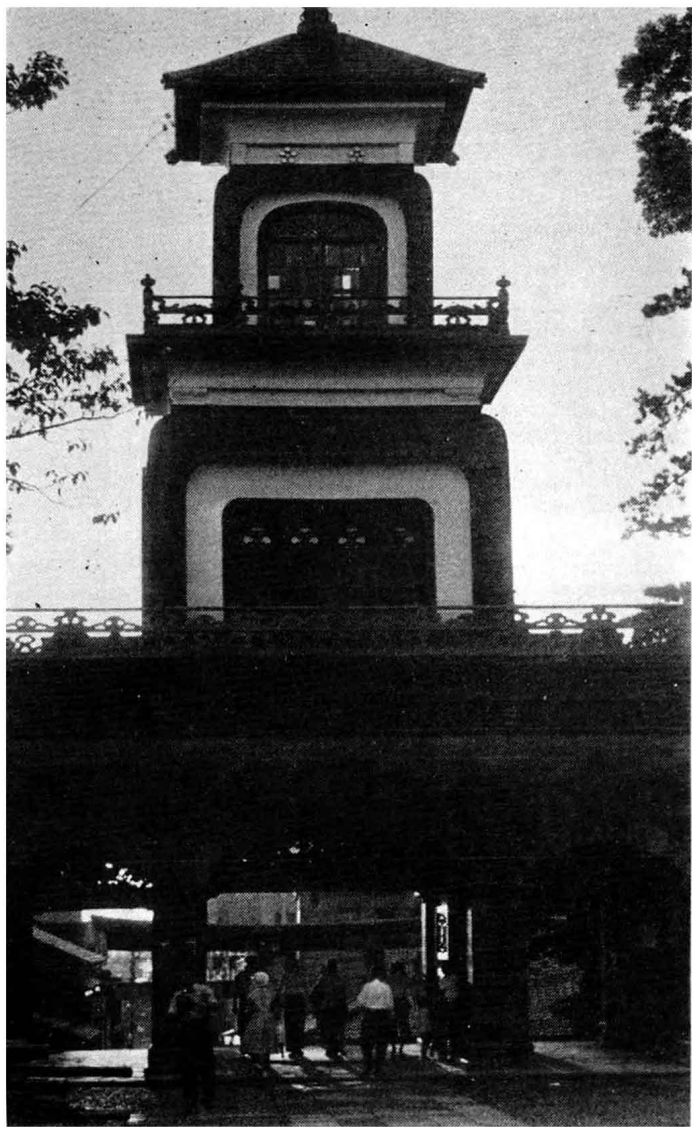
加越温泉郷といわれるこの地方の温泉地の中心にあたる金沢の街からして、そうであろう。ここを一度たずねて、それきりで思い捨てられる人は、まずあるまい。ふしぎに、あとをひく街なのだ。兼六園のような名園、濠をめぐらした城跡、古い社や寺々、そんな名のある建造物の一つ一つに、見物の足をひきとめられるばかりか、何でもない家並の路地にも、ちょっとした橋のほとりにも、妙に私たちの郷愁をそそのかすまいがある。美しい調和を失わない純粹な日本の街が、ここにあるせいかもしれない。だが、私たちの心にいつまでも糸をひいて、再訪をうながすのは、それだけではない。土地のあたたかい人情の働きが、それに重なる。

その人情のあたたかさは、金沢の街に限らず、周辺の温泉地にも、そのままではまる。情が深いのである。それは山中、芦原（あわら）のような豪華な温泉にも、粟津（あわす）のような湯治場風のシミな温泉にも、共通したあたたかさだ。古風なキメの細かいサービスが、だんだん

近代的ドライきにとって代られて
 いる折から、加越温泉郷は特に、湯の
 香とともに人の情けのぬくもりを求
 める男性にとって、珍重すべき存在
 かもしれない。夜行で東京を立て
 ば、朝目を覚まして、ゆっくり洗面
 を済ませた頃、金沢駅のホームに立
 てる。もう汽車を降り立っただけで、
 前夜までの騒音とほこりっぽさと、
 あわただしい気分は、うそのように
 消え去っている。人通りは多くて
 も、落ちつきがあつて、やかましき
 や汚れっぽさのないのが、金沢の街
 である。

温泉郷は、もうこの市内から始ま
 る。市内といっても、それは行政上のことで、じつは、駅から一六キロ余り離れ、バスに四〇分
 も乗る白山連峯の一角、高尾山のふもとであつて、郊外といったほうが、ぴったりくる。湯涌
 (ゆわく)温泉である。山あいの溪谷にわく温泉だが、谷が比較的広いので、せせこましい感じ





金沢市内にある異国風な建物の尾山神社

がしない。宏荘なビル建築の旅館もあれば、湯治本位の安い宿もある。二食ついて一〇〇〇円以内でも泊れるし、部屋代だけで三〇〇〇円のところもある。最近熱海、別府を始め大温泉地に、旅館のビル化がさかんで、話題を投じているが、洋風ビルの内部に純日本間という様式の日本旅館では、ここなどハシリといつていいくらい、早いほうだった。

金沢から粟津へと進む途中に、松任（まつとう）がある。ちょっと素通りするのがおしいのは、例の加賀の千代女（俳人）の千代尼塚があるばかりか、この名物の「あんころ」が、絶品だからである。左党にもファンがいるくらいだから、下車して見物する暇のない場合でも、駅売でせめて一度試してみる値打ちはあろう。土地では松任をマツトウとツをのんで発音している。

粟津温泉は粟津駅から電車かバスで一〇分、千三百年余りの長い歴史を持つ北陸最古の湯という説明が、いとも素直に受けとれるほど、温泉街のありようは古風である。宿の建物の入口にしても、今どき見られない古い作りが、どこかお寺のようにさえ、思える。二十年ぶりでやってきた人が、以前と同じ部屋へ通してもらい、あまり普通りなので、二十年二タ昔の歳月の経過を、瞬間疑った、という話も、ほんとうのような気がするところだ。湯治場の名残りをよくとどめているせいか、宿泊料も高くない。六―七〇〇円から泊れる。最高は二五〇〇円くらい。療養の長滞在の場合は相談に応じる。

粟津から山代（やましろう）へは電車が行く。金沢からの直行バス（一時間三五分）もある。この道すじにもまた途中下車したい場所があつて、それは那谷寺（なたでら）という古寺だ。岩山のきり立つ間、木立や崖に見えかくれして、堂塔の散在するまるで南画の風景を、現実に見るよ